

外国の文献から

『心情と知性の教育』

—日本の就学前と小学校教育に関する考察—

第二章 幼稚園での経験——遊び・コミュニティ・反省

渋川 明日香

幼稚園のカリキュラム——遊び中心

日本の幼稚園での調査を始めるとき、筆者は整然とした教室と教師主導の活動を想像していた。しかし実際は全く違った。

調査した十五の日本の幼稚園では、五歳児は一日の半分を自由遊びで過ごし、半分はクラス全体

の活動をしていた。十五の幼稚園での時間配分は、五十パーセントー自由遊び、十四パーセントー図画工作、八パーセントー歌、ダンス音楽の練習、七パーセントー行事または集まり、七パーセントーお昼またはおやつ、五パーセントーお話の時間、五パーセントー掃除、一パーセントー学習活動、である。

自由遊びはわざわざ日本に來なくても見る事ができる光景である。しかし、自由遊びは単に楽しく過ごすだけの時間ではないということにある時気づいた。日本の就学前教育の目標——子ども同士の関係を育て、集団の中で生きる意欲と能力を築くこと——に、自由遊びは重要な材料を提供しているのである。

コミュニティ作りのための自由遊びの利用

子どもは遊びの中でお互いに知り合うようになる。日本の幼稚園の教師はこのような自然な接触

をクラス全体のコミュニティ作りの足場として利用している。例えばある幼稚園では、数人の五歳児が自由遊びの中で紙の時計を作ったとき、教師がそれに注目してクラスの集まりで他の子どもたちに見せるように言った。次の日には時計を作る子どもが増え、子どもたちはたくさんできた時計を「売る」ことをクラスの集まりで提案した。その次の日、クラスの多くの子どもが、「時計屋さん」で時計の売り買いをしていた。そして招くのに、年少クラスを「お客さん」として招く「時計屋さんデー」の計画が作られた。次の数日間、間に渡って子どもたちは時計を大量に作り、店、お金、「お客さん」のための財布なども作った。この活動の始まりは数人の子どもの自由遊びにあったが、それはすぐにクラス全体、五歳児クラス全体の集団活動になり、ついには園全体を巻き込んだ「時計フェスティバル」になった。教師たちは小さな遊びから大きな規模の活動への橋渡

しを様々な方法で行う。

L・コトロフによる研究でも三人の子どもの自発的な遊びが三週間のクラス全体の活動に発展したということが報告されている。コトロフによれば、子どもたちは個人的な遊びをしても、必ずクラスの集まりに出来上がったものを持っていく。教師は、子どもたちに、うまくできない友達を助けるように言う。また子ども一人一人の作品のユニークな特徴を褒めて自信をもたせるだけでなく、他の子どもにも影響を与えるようにしている。

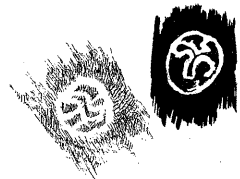
コミュニティを築くためのその他の方法

様々な意味で日本の幼稚園はコミュニティというものを避けられない。子どもたちはしばしば集合的にクラスの名前（さくら組さんなど）で呼ばれる。クラスメイトをさす言葉は「ともだち」である。「遠足の絵を書くときにはお友達を忘れな

いで」という時、この

言葉は個人的な友人を指すのではなく、クラスの人々全体を指している。子どもの友達関係を尋ねるときには「個人的な友達」という言葉を用いなければならない。

コミュニティの一部であるということは行事を共有するということである。全てのクラスが一日の始めと終わりに歌やダンスや話し合いなどの行事を行う。このような行事は、歌を歌って挨拶をする程度のものから園全体の集会まで様々である。毎日あるいは毎週ある行事に加えて、入学式・卒業式・運動会などの大きな式や祭が行われる。このようなときには両親も参加する。子どもたちは、両親や新入生や地元の人々に見せるためにダンスや歌を数週間かけて練習する。幼稚園の



行事では、楽しさと全員参加、集団全体の成長や達成を確認することが重要視されている。また、歌やダンス、行事、図工の作品作りなどは全て、「友達」や「家族のような」コミュニティの一員なのだという感覚を強めている。

責任感あるメンバーになる——自由遊びの役割

自由遊びは、日本の幼稚園生活の第二の目標、つまりクラスの中の責任感ある親切なメンバーになることに役立っている。

筆者が調査したすべての幼稚園で一日に少なくとも一回のクラスの集まりがあり、そこでは必ずその日の活動を振り返る。誰かが喧嘩したことや泣いたこと、危なかったことなどが取り上げられる。教師は、筆者から見れば個人的な問題に思われること（誰かがわがままを言ったとか誰と誰が喧嘩をして誰が仲裁に入ったかなど）をクラスの問題として取り上げる。子ども

もたちは解決方法を考えることを求められ、解決を助けた子どもは褒められる。

話し合いでは、教師の価値観がはっきりと現れる。教師は子どもたちが仲間外れをしないで遊んでいたかどうかについてコメントすることが多い。また、最も一般的な話題は係の仕事についてである。動物の世話や掃除について係の子どもから注意してほしいことが述べられ、教師のコメントによって議論が起こる。動物を飼うとはどういうことか、友達が係の仕事をさぼっていたらどうするか、危ないことをしている子がいたらどうするかなどについて時には二十分から三十分の話し合いが続く。教師は子どもたち全員が興味を持つように、大げさな言い方で説明したり、子ども自身の意見の橋渡しをしたりする。しかし、教師が答を与えるということはほとんどない。むしろ、たとえ時間がかかっても子どもたちで問題解決できるように刺激を与えている。そして、このような議

論にかける時間が長く、関心も高いことから、このような議論をする事が筆者が訪ねた日本の幼稚園の本当のカリキュラムであると考えるようになった。葛藤や親切というものを伴う自由遊びがこのカリキュラムに役立っている。その日の予定がどうであれ、遊びの中で起こった問題が常に優先され得るのである。

一九八四年の全国規模の調査でも、日本の幼稚園では、「係・日直」、「運動会」が重要な活動と見なされ、自由遊びとグループやクラス全体のためあてが重視されているということが明らかになっている。また、文部省の幼稚園教育の目標も「興味」「関心」「意欲」を育てることに焦点が当てられている。

相反するイメージ——自由な遊びか受験準備か？

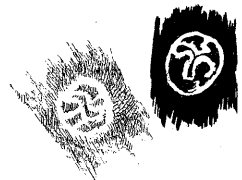
アメリカのメディアが、日本の子どももの幼稚園の受験準備について心が痛むような話を伝えてき

たために、日本の幼稚園で自由遊びが重視されていると聞いてアメリカ人はたいへん驚く。調査によると、特別な活動を通して子どもの能力を発達させる

ことを重要視する日本の幼稚園はわずかにパーセントである。公立私立の違いはあるが、文字や数字を直接教える幼稚園は少ない。

H・ステイブンスンの日米比較調査によれば、むしろアメリカの幼稚園の方が勉強を直接教える活動が多く、日本の子どもはアメリカの子どもの四倍近くの時間を自由遊びに費やしている。

また、J・トビンの調査では、半分以上のアメリカの親は幼稚園で勉強がうまく行くことが重要と考えているのに対し、そのような考えを持つ日本の親は一パーセント未満である。逆に日本の親の



八十パーセントが他人への思いやり・共感・関心を重要視しており、このことを重視するアメリカの親はわずか三十九パーセントだった。さらに、別の調査では、子どもが幼稚園でうまくやっていたために母親ができることとして、教育的な活動を共にするのが最も良いと考える母親は、アメリカではほぼ半数であるのに対し日本では二パーセントしかない。日本の母親は、子どもの健康を守り、幼稚園の活動に興味を示すことが最も良いと考えている。

ロイス・ピークの研究によれば、「エリート」小学校に入学した子どもの半数は受験準備をする教室に通っていたが、公立の小学校に入学した子どもではほとんどいなかった。日本の子どもの九十九パーセントは公立の小学校に通うということを考えれば、受験準備クラスに通うという事は希であると言える。また、幼稚園児が通う受験準備クラスでは、読み・書き・算を教えるのではな

く、「楽しく自信のある自己表現、正確に指示に従うこと、典型的なテスト項目に慣れておくこと」を教える。文部省の立場に従い、「エリート小学校の入試では読み・書き・算の技能の要求は最小限に抑えられ、子どもたちには複雑な指示を理解し覚えることが要求される。幼稚園での受験制度のプレッシャーは勉強ではなく文部省の政策が示すような子どもの態度への要求としてかかっているのだろう。アメリカの調査によれば、遊び中心の幼稚園カリキュラムの方が、直接的に教えることよりも、学ぶ意欲を育て、より高度な学習達成を促す。なぜなのだろうか。それはおそらく子どもは自分にとって意味のある活動をしているときに最も良く学ぶことができるからであろう。

(お茶の水女子大学大学院)